

## 「やらない抜き打ち訓練」の効果に関する考察

東洋大学理工学部 学生会員 ○海老原陽彩  
東洋大学理工学部 正会員 及川 康

### 1. 問題意識

防災訓練は、災害発生時における適切な対応行動を体系的に習得しておくことができるという点で有効であることに疑いの余地はない(表-1の※1)。しかし、実際の学校や職場での従来の一般的な訓練では、参加者へ実施日時を事前に周知したうえで実施する形態が多くを占めている。このことが、たとえば「訓練の時だけやっておけばいい」などといったように、いわゆる「いつ発生してもおかしくないという中腰の姿勢(常に【備】える構え)の醸成」とは程遠い形骸化した状態をもたらしてしまっているという懸念も存在する(表-1の※2)。本稿では、これを「決め打ち訓練」と呼称することとする。

「決め打ち訓練」の形骸化に対する打開策として近年では、抜き打ち型訓練(以下、「抜き打ち訓練」)が提唱されている。素直により、「抜き打ち訓練は、事前に訓練日時を知らせない点がポイントであり、抜き打ちで訓練を実施することについては、事前に知らせているものとする。」と定義付けている。「抜き打ち訓練」の最大の特徴として、いつ訓練が行われたとしても咄嗟にいつでも適切な対応行動をとれるよう、常に【備】える姿勢を身につけることができる点がある(表-1の※3)。もちろん、実際に行う訓練によって災害の発生後における適切な所作を体系的に習得できるという点で有効であることに変わりはない(表-1の※4)。しかし、「抜き打ち訓練」の対象者にとっては実際の災害と同様、授業や業務の停止、場合によっては負傷したりする混乱等も含め、不意の緊急事態が唐突に訪れることになることから、「決め打ち訓練」にはない特別な配慮等をも要することとなる(表-1の※5)。

勿論、「抜き打ち訓練」での懸念事項(表-1の※5)に対するケアがじゅうぶん可能であり、それがさほど負担ではない状況での「抜き打ち訓練」の実践的意義に疑う余地はない。ただ、そうではない状況での「抜き打ち訓練」の実施には懸念事項(表-1の※5)への

対処に何らかの工夫や慎重さを要するのも事実である。

ここで、「抜き打ち訓練」の最も大きな特色(表-1の※3)にあらためて着目するならば、その効果を担保するには、訓練対象者を「いつ行われるかわからない」という認識状態におくことこそが要点であった。この効果(表-1の※3)を担保することに限って言えば、この認識状態を維持することさえできていれば実際に訓練を行う頻度は少なくてもよい。極論すれば、いわば「やらない抜き打ち訓練」とでも称すべきスタイルである。そうであれば「抜き打ち訓練」で懸念された事項も生じない(表-1の※6)。「抜き打ち訓練」に特有の効果に着目するなら(表-1の※7)、このような「やらない抜き打ち訓練」もじゅうぶんに検討に値する選択肢であるように思われるのである。なお、ここではいうまでもなく、「決め打ち訓練」や「抜き打ち訓練」などの実際の訓練によってもたらされる効果は無い(表-1の※8)ことに注意を要する。検証を要するのは「やらない抜き打ち訓練」によって「常に【備】える構え」の醸成という効果(表-1の※7)が本当に担保されるのか否かという点である。

### 2. 「やらない抜き打ち訓練」の効果

この点について本稿では、簡便な心理実験による検証を試みた。実験はパソコン画面上で行われ、被験者は「【備】える/【備】えない」の2択からの選択作業を1~72の計72回繰り返す(1ターンを月に見立て12カ月×6年のイメージ)。実験開始時の持ち点(100点)から各試行結果に応じて表-2と表-3に示す減点が施されていき、終了時点での持ち点が高得点の場合に粗品が提供されるというルールが説明される。「災害」はランダムに「発生」する。表-2に示す通り、「【備】える」は一定のコスト(-1)を要するため、「非発生」ならば「【備】えない」が最適戦略である。ただ、「【備】えない」状態で災害が「発生」すると被る大きなダメージ(-12)を、「【備】える」ことで大幅に回避できるメリットがある。「訓練」の実施タイミングは条件1~

表-1 各訓練の主な特徴および実験時の制御条件

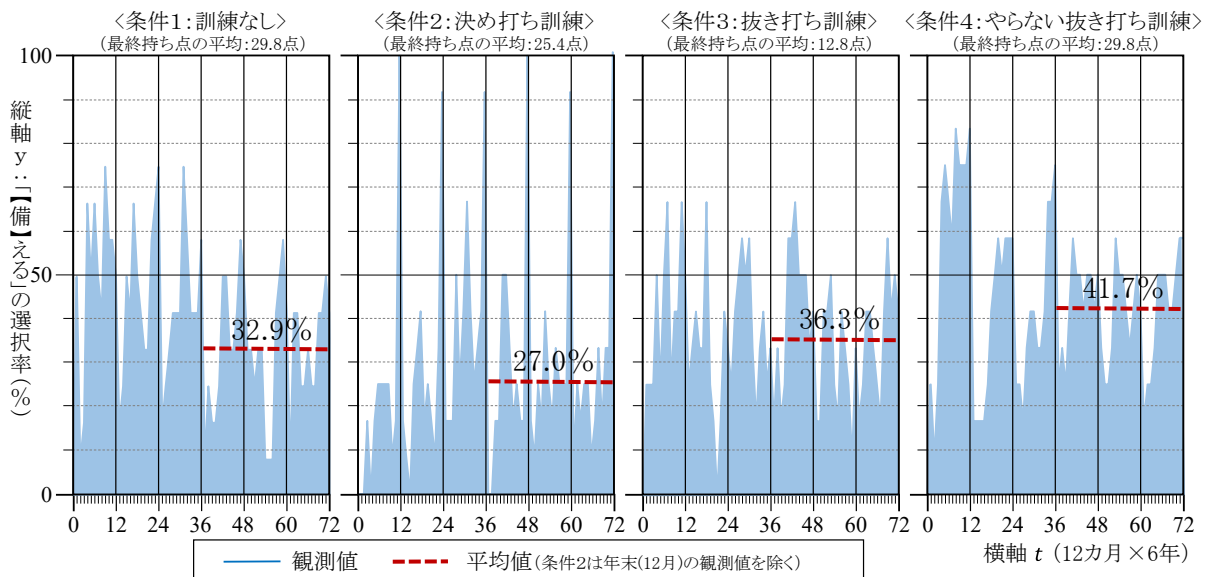
条件	呼称	実際に想定される主な特徴			実験時の制御条件		
		(発生前の姿勢) いつ来てもおかしくないという中腰の構え(常に【備】える構え)の醸成	(発生後の所作) 手順の練習と習得	訓練実施にともなうコスト	災害の発生	訓練の実施	訓練に関する被験者へのアナウンス
1	訓練なし	—	—	—	ランダム	—	—
2	決め打ち訓練	× (※2)	○ (※1)	△あり		12月	12月に訓練実施
3	抜き打ち訓練	○ (※3)	○ (※4)	×あり (※5)		ランダム	抜き打ちで
4	やらない抜き打ち訓練	○ (※7)	× (※8)	○なし (※6)		なし	訓練実施

表-2 災害に関する利得表

		災害	
		発生	非発生
被験者の選択肢	【備】える	-3	-1
	【備】えない	-1 2	0

表-3 訓練に関する利得表

		訓練	
		実施	非実施
被験者の選択肢	【備】える	-2	-1
	【備】えない	-6	0



4で異なる(表-1参照).表-3に示す通り「【備】える」は一定のコスト(-1)を要するのは同様であるが,「【備】えない」ままの不意打ち状態で訓練が実施されると種々の混乱(-6)をきたすところである,「【備】える」ことでそれを軽減することができる.

以上の条件にて大学の学部生12名を対象に実験を実施した(2023年10月16日).12名中の「【備】える」の選択率を試行ターン( $t=1\sim 72$ )ごとに図-1内の面グラフ(青)で示しており,その後半( $t=37\sim 72$ )の平均値を破線(赤)で示している.これによるとまず,やはり「決め打ち訓練」の場合だと,訓練が実施されない期間での【備】えはかなり疎かとなっており,「訓練の時だけ【備】えておけばいい」という形骸化の傾向が顕著となってしまっていることがわかる.他方,そのような形骸化の傾向は「抜き打ち訓練」では大幅

に改善されている様子(効果)もまた確認することができる.その改善効果は,本稿の焦点である「やらない抜き打ち訓練」においてもなお保持されるどころか,むしろ向上している様子をも見て取ることができる.被験者の最終持ち点の平均値が「抜き打ち訓練」で大幅に低いのは不意打ち故の混乱によるダメージ(表-1の※5)が影響しているものと考えられるが,「やらない抜き打ち訓練」ではその懸念も払しょくされている.これらの結果を見る限り,「やらない抜き打ち訓練」によって「常に【備】える構え」の醸成という効果(表-1の※7)が本当に担保されるのかという論点への回答は,控えめに表現して「yes」である.

参考文献:1)秦康範,酒井厚,一瀬英史,石田浩一:児童生徒に対する実践的防災訓練の効果測定-緊急地震速報を活用した抜き打ち型訓練による検討-,地域安全学会論文集,第26巻,pp.45-52,2015.